



目白大学新宿図書館

平成29年度読書推進プログラム  
第15回入賞作品集

第15回  
作品集

## もくじ

受賞者一覧	1
館長講評	2
受賞作品	
一等 私が手にした光 薩摩 美由（中国語学科1年）	4
二等 自分は自分であるが他者でもある 竹村 佑真（心理カウンセリング学科3年）	6
佳作 「坊っちゃん」と現在の類似 播間 彩香（メディア表現学科4年）	8
佳作 今、わたしができること 黒岩 光里（中国語学科2年）	10
佳作 本当の意味を知ること 清水 聖香（心理カウンセリング学科3年）	12

# 受賞者一覧

## 【一等】

中国語学科 1年 薩摩 美由

## 【二等】

心理カウンセリング学科 3年 竹村 佑真

## 【佳作】

メディア表現学科 4年 播間 彩香  
中国語学科 2年 黒岩 光里  
心理カウンセリング学科 3年 清水 聖香

## 【参加賞（応募受付順）】

要田 洸太郎（児童教育学科3年）  
小林 夏月（児童教育学科3年）  
小島 信宏（児童教育学科3年）  
松本 麻里（児童教育学科3年）  
鶴巻 佳乃（児童教育学科3年）  
松村 智子（児童教育学科3年）  
高橋 晴花（児童教育学科3年）  
矢島 圭人（児童教育学科3年）  
大橋 紘子（児童教育学科3年）  
水村 倅基（児童教育学科3年）  
竹内 章太郎（児童教育学科3年）  
鈴木 梨花（児童教育学科3年）  
大沼 ゆりか（児童教育学科3年）  
今泉 莉夏（児童教育学科3年）  
高橋 由依（児童教育学科3年）  
菊地 梨那（児童教育学科3年）

小早川 はるか（児童教育学科3年）  
橋本 大知（児童教育学科3年）  
八木 美祐（心理カウンセリング学科3年）  
伊藤 悠也（心理カウンセリング学科3年）  
渡邊 祐太（心理カウンセリング学科3年）  
舛井 晴香（心理カウンセリング学科3年）  
平本 夏海（心理カウンセリング学科3年）  
滝澤 真彩（心理カウンセリング学科3年）  
畠山 桃子（心理カウンセリング学科3年）  
松浦 優貴奈（心理カウンセリング学科3年）  
飯山 稜太（児童教育学科3年）  
田中 友理（メディア表現学科4年）  
田中 寿明（児童教育学科3年）  
綱島 滉平（児童教育学科3年）  
土佐谷 航生（メディア表現学科4年）  
山川 孝那（児童教育学科3年）  
梅原 拓哉（児童教育学科3年）

## 【特別賞】 該当者なし

## 館長講評

各賞に入賞された皆さんにまずはお祝いの言葉を申し上げたいと思います。おめでとうございます。

最初に、今回の読書推進プログラムの状況をご報告したいと思います。応募者数は38名と昨年度と同じでしたが、その内訳は大分違っていました。昨年度は大学院生1名、大学生36名、短大生1名とバラエティに富んでいましたが、今年度は全て大学生でした。大学院生と短大生がいなかったのはちょっと寂しい感じもしますが、大学生の応募がそれを補ってくれたので、主催する側としては沢山の応募を大変嬉しく思っています。もう一つの特徴は多くの学生が応募してくれた学科が複数あることで、一所懸命に取り組んでくれた学生の皆さんとともに、熱心に指導して下さった先生方に御礼を申し上げたいと思います。

応募の対象となった本は、今回は全部で24冊ありました。最も多い4人が選択した本が1冊ありましたが、これが「坊っちゃん」でした。改めて人気の高さを感じた次第です。その他に3人が選択した本が4冊、一人しか選択しなかった本が16冊だったので、あまり重ならなかったのもよかったと思います。小説や評論、自己啓発書から専門書まで、多くのジャンルの本が選ばれており、学生の皆さんの関心が広い領域に渡っていることも感じました。

これらの作品について、図書委員の先生方が分担して読み、評価をし、コメントもしていただきました。忙しい時間を割いて作品を読み、丁寧に評価して下さった図書委員の先生方にも御礼申し上げます。そんな先生方からのコメントも含めて、各作品についてご紹介いたします。

1等の薩摩さんの「私が手にした光」（選択図書は「希望の作り方」）は、本書の内容と自分の経験をうまく重ね合わせ、自分を理解する手立てとしています。あらすじを書き連ねることをせず、自分の考えをはっきりとまとめているところがよかったというコメントがありました。希望という言葉を手引にした自己論と言ってもいいかもしれません。

2等の竹村さんの「自分は自分でもあるが他者でもある」（選択図書は「サブリミナル・マインドー潜在的人間観の行方」）は、自分のことを知りたいという基本的な欲求がもとになった作品でした。自分を理解するために心理学の理論を用いていますが、理論を安易に自分に当てはめるのではなく、もっと根本的なところで考えようとしているところに好感が持てました。

佳作の播間さんの『坊っちゃん』と現在の類似』（選択図書は「坊っちゃん」）は、素朴でストレートな現代の若者らしい作品でした。初々しく、読みやすく、文章や構成も整っていますので、これをきっかけにさらに読書に親しんでほしいと思うような作品でした。

同じく佳作の黒岩さんの「今、私ができること」（選択図書は「置かれた場所で咲きなさい」）は、とても素直に書かれた作品でした。タイトルに惹かれた理由を現在の自分に当てはめ、本の中から自分が感動した面をうまく引用しながら生き方を考えています。

同じく佳作の清水さんの「本当の意味を知ること」（選択図書は「海からの贈物」）は、とても知的で、言葉の選び方や文章の運び方が印象的な作品です。女性の役割や人としての幸せなど、根本的な問題についての現時点での理解、思考の進展等がよくわかりました。

コミュニケーションは、話す、聞く、読む、書くの4要素から成り立っていますが、読む、書く機会は次第に少なくなってきました。今、流行のSNSは数行の短い文で済んでしまいますので、若者が長い文章を読んだり、書いたりする機会は減ってきました。読解力、表現力の衰えがマスコミでも話題になっています。読んで理解する、考えたり感じたりしたことを表現するという能力は、私たち人間だけが持っているとても貴重な能力です。ぜひ、今後も本を読み、感じたことを表現して行ってほしいと思います。

平成 30 年 2 月 3 日  
目白大学新宿図書館長 沢崎 達夫

## 私が手にした光

中国語学科1年  
薩摩 美由

「長い暗闇の中に一筋の光が見えた」。

そんな心情を抱いたちょうどそのころ、私はこの本に出会った。

『希望のつくり方』とは、何とも不思議なタイトルだ。まるで姿形があるもののよう  
に希望を例えている。私は、希望とは無意識の内に現れて消えるような、あやふや  
な、夢のようなものだと思っていたので、希望を生み出す方法など考えたこともない。  
この本の題名を最初に目にした時は、半信半疑だった。それでかえって、この言葉に  
惹かれ、読んでみたいという気持ちになったのだ。しかし今思い返すと、冒頭に述べ  
た心境の変化が、私をこの本に引き寄せたようにも思う。

本書は、社会のありようが希望に大きな影響を与えるという視点から希望学を研究  
する著者が、希望とは何か、日本ではなぜ「希望がない」といわれているのかなど、  
現在の日本社会と希望の関係について述べたものである。

本書によると、多くの人々は自分で行動せずに望みを叶えるような、「変わる」変化  
を求める傾向を持つという。しかし、本当に大切な変化は、自分で変えようと努力す  
る「変える」変化であるから、そのために行動すべきだとも書かれている。私はハッ  
とした。今まで自分は希望を生み出す努力や行動をしてきたのだろうか。

読み進めるうちに、私は高校時代から現在までの自分の道のりを本書に重ねていっ  
た。たとえば第1章に「「頑張る」は禁物？」と題する一節がある。「頑張れ」という言葉  
は、時には人を鼓舞し、元気にさせることができる。一方で、人にプレッシャーを  
かけてしまうこともあるという。目標が見つからない人には大きな力を与えるが、目  
標が見つからない人は、この言葉によって追い詰められてしまう場合もある。この部  
分に、私は深く共感した。

高校2年の頃、幕末の歴史が好きで、新選組に興味を持っていた私は、大学の史学  
科への進学を志望していた。しかし同時に、それが本当に自分の進みたい道なのかと  
いう迷いもあった。高校の先生方に相談すると、決まって「勉強を頑張れば、本当に  
やりたいことが見つかる」、そう言われた。当時の私は、その「頑張れ」という言葉  
にも疑問を感じていた。目的が定まっていれば勉強をする意味が見つかり、意欲も出  
るだろう。でも目的が定まらなると、何から手をつければ良いのかわからない。「頑  
張れ」は、進むべき道がわからないままの当時の私を、不安の暗闇に沈めていった。

暗闇からなかなか抜け出せない私にヒントを与えてくれたのは、ある先輩だった。

進路の悩みを相談すると、「大学でやりたいことを見つけるのも遅くはないよ。選択肢を狭めず、大学でさまざまなことに挑戦してみたら」と言ってくれたのだ。この一言で、私は肩の荷が少し軽くなったように感じた。

本書では、アメリカの社会学者グラノヴェッターが提唱した「ウィーク・タイズ (Weak Ties)」、すなわち「ゆるやかな絆」「弱い結びつき」という考え方が、新しい人生を歩む時に重要な鍵になると述べている。自分らしい道を歩もうと新たな選択する時、自分や家族、友人など常に近くにいる存在に相談するだけでは、同じ考えばかりに偏ってしまうおそれがある。もし、いつも会うわけではないが信頼できる存在、つまりウィーク・タイズとしての知人がいれば、自分にはなかった考えや経験をしていることも多く、新しい提案や助言をしてくれるかもしれない。私にとって先輩は、まさに理想的なウィーク・タイズだったといえるだろう。

その後、縁あって目白大学の中国語学科に入学したが、そこで私はまた、大きな不安を抱えることとなる。私の周りのクラスメイトにはネイティブ・スピーカーも多く、中国語を流暢に話せる人が大勢いたのだ。私は全くの初心者だったので、教室で飛び交う中国語をひとつも理解できなかった。発音の練習ではネイティブの友達から指摘を受けても、どこが違うかすら理解できないほどであった。

すっかり自信をなくした私を救ったのは、好きな中国人歌手の存在である。初めは、中国語の学習のために曲を聴いていた。しかし、次第に歌詞の意味やドラマのセリフなどを理解したいと思うようになり、中国語を学ぶのが少しずつ楽しくなった。勉強を重ねるうちに歌詞やセリフの中で聞き取れる単語が増え、意味を理解できるようになる。それが学習のモチベーションに繋がった。現在では中国語に出会えたことを嬉しく思うし、毎日の勉強が楽しくてしかたがない。冒頭に書いた「一筋の光」とは、そんな今の私の正直な心情なのである。

本書の中盤に、「希望の多くは失望に変わる。しかし希望の修正を重ねることで、やりがいに出会える」という言葉がある。挫折を味わった際、失望の渦に沈むだけでなく、失望からまた新たな挑戦を試みることで違う道を見つけ出せる。この行動を積み重ねた先に、自分のやりがいが見えてくるといふ。

本書に出会ったことで、私は今まで歩んできた道を振り返る時間を持てた。本書に書かれている希望のつくり方と重ねてみると、多くの共感する点が見つかった。私は、大学受験という人生の大きな選択の中で、悩み、挫折した。しかしそのとき思考を停止したり歩みを止めたりせずに行動したからこそ、自身の手で希望を見つけ、希望の光を手にすることができたのだ。今は大学生活のなかで、たくさんの挑戦をしたいという気持ちになっている。一見遠回りのように思えることでもどんどん経験したいし、さまざまな人と出会って語り合い、自分を成長させたいと思う。この大学での4年間の経験こそが、未来の私の希望をつくるヒントになると信じているから。

玄田有史『希望のつくり方』岩波書店

二等

## 自分は自分であるが他者でもある

心理カウンセリング学科 3年  
竹村 佑真

私は自分のことが理解できるのは自分自身だけであると思っていた。しかし、この本を読み進めていくことにより、自分自身を理解しているのは自分であることに間違えはないのだが、その捉え方は他者と同様であることに加え、自分の心の中には自分でも認識できない他者に近い自分がいることが分かった。

私がこの本を選んだ理由は単純であり、ただ私が現在心理学を学んでいるからである。しかし、心理学を学んでいるにも関わらず自分の心について分からないことばかりだと感じ、理解したいとずっと思っていた。実際私は今現在の生活の中で、本当はなにを思っているのだろう、本当はなにがしたいのだろうと考えても答えは出てこない上に、優柔不断な面が多々ある。もちろん、好きなものが無い訳ではないし、やりたいことも存在する。そんな中、友人たちは自分の選択をしっかりと持っていることに加え、自分を理解しているように感じていた。時に本当の自分は何を考えていて、本当の自分はどのような人間なのだろうとまで考えている。なぜ自分が泣いているのか、理解できない涙の本当の理由は自分のことにも関わらず最後まで分からない。今の自分の感情が分からないという感覚に陥る。これからのことより、私は自分の心について知りたいと思いこの本を選択した。

この本は、情動や認知、注意など様々な処理過程に潜在意識が存在することを実験を通して証明している。第一講から第六講までは認知的不協和理論や情動二要因理論、カクテル・パーティ効果などの理論や実験の紹介を行っており、第七講からは意思とはなにかや危機感の説明が書かれている。実際に行われた実験内容が紹介されていることに加え、講義のようなスタイルで書かれていることもあり、とても読みやすい作品である。また、途中にまとめの項目があることによって、より理解を深めることが可能である。

私が自分自身を理解する上で最も大切だと感じた部分は、第一講と第九講である。第一講では、ベムという社会心理学者による自己知覚理論という考え方から、他者理論の過程と同様のプロセスだと主張している。また、フェスティンガーとカールスミスの「一ドルの報酬」実験により被験者の状況と被験者自身の感情との関係により認知的不協和の低減というような考え方自体、本人たちの無意識的な理由づけ及び合理化過程の存在を示している。私は認知的不協和理論の説明を読んでいくにあたり、自分自身も身近に同じような体験をした経験があると思った。内容は、テレビで放送さ

れていた海外の有名なデザイナーが作った高額な洋服の紹介であった。しかし私にはその洋服の良さは理解できず、あまり良いデザインではないと思ってしまった。しかし、後から考えてみると洋服の値段があまりにも高く絶対に手の届かない洋服だったからこそ、そのような感情を抱いたのではないかと考えた。これは認知的不協和を和らげようとするものなのではないかと理解することができた。このように、認知的不協和は身近なところに存在しており、これもまた無意識の自分が確立されている証拠なのではないかと私は考えることができた。

また第九講では、事故による実際の真実に反する意識や直接経験の直接性と特権性により自己知覚理論の証明、また潜在的認知プロセスの重要性が社会や法律などに広がり、繋がっていくことを示している。中でも自分自身の理解において最も印象に残ったものは、内的コミュニケーションと外的コミュニケーションに関することだ。実際にこの本に載っている一部を簡単に紹介する。怒りという言葉は自分自身に適用する場合は怒りそのものを意味するが、他人に適用する場合には怒りによると「思われる」行動を意味しているにも関わらず、この二つが全く違う意味を持っているとは言えないということである。この時、内的コミュニケーションと外的コミュニケーションとを分けて考えなくてはならず、自分の知覚にも他人の知覚にも外的コミュニケーションが主役をつとめるからであるとされている。これは第三講で紹介されている分割脳に関連しており、外的観察と推論、解釈は認知的不協和や自己知覚理論、情動二要因説などの社会心理学的知見に類似するとガザニガは指摘している。

私はこの本を読んで今まで考えていた人間観が様々な点から崩されたことに加え、自分自身の意識の独立を感じることができた。私の中にいる意識可能であり自覚している私と潜在的な自己、無視できない存在である私の存在はとても大きく、統一は叶わないものだと学ぶことができた。また、自分自身を理解するためには自分を客観的に見ること、他者を見るよう同様に考えることが大切であり、その潜在的なもう一人の私は誰も想像できないほどの可能性を秘めているのではないかと考えた。意識できない、無意識の私だとしても私であることは否定されることはない。たとえ他者的存在であってもそう言えるだろう。また、この本の中で、人間の心は顕在的、明証的、自覚的、意識的な過程だけではなく潜在的、暗黙的、無自覚的、無意識的な過程にも強く依存していると書かれている。このことより、私たちは生活するうえで無意識がなくてはならない存在であると理解できるだろう。また、意識可能な自分と意識不可能な自分は密接に関係していることに加え、お互いがお互いを支え合い、必要不可欠なものであると感じることができた。

下條信輔『サブリミナル・マインド』中央公論新社

佳作

## 「坊っちゃん」と現実の類似

メディア表現学科 4年  
播間 彩香

私がたくさんある本の中から、なぜ「坊っちゃん」を選んだのか。それは以前、テレビでスペシャルドラマとして「坊っちゃん」が放送されており、主人公は自分の意思を尊重し、様々なことにも動じない精神の持ち主だと感じ、原作を読みたいと興味を持ったからである。原作を読んだ感想として、正直なところ文章が難しく理解するのが容易ではなかった。しかし、最初にドラマを見ていたため、この文章が表現しているのはドラマのこの場面かな？と考えながら読むことができ、楽しかった。読むことに時間がかかったが、私自身以前から読みたいと感じていた本を読むことができ、有意義な時間を過ごせたと感じている。

「坊っちゃん」の前半は、主人公の性格、小学生や中学生の頃の話、東京で主人公と一緒に暮らし、家事などの雑事を行う清との話がかかれていいる。そのあと中学校の数学の教師として赴任し、自分の意思を尊重しながら教師の立場を全うする姿が描かれている。

私がこの作品を読んで感じたことは主人公の清への対する思いの変化が大きいところである。最初の場面では清から「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」と言われると喜ぶことはなく、むしろ気味が悪いと感じている。しかし、中学校の教師として東京を離れ、清とも離れて暮らすようになり、宿舎に帰ると清の体調を気遣ったり、清は以前こう言ってたなと思い返したりする場面がある。最後に東京に帰ってきたときには一番に清に帰ってきたことを伝える場面となる。そのとき、清が涙を流しながら喜んでいる場面では主人公はその姿を見てとても嬉しがっている。最初は少し煙たがっているように感じていたのに対し、離れて暮らすことにより、清が主人公にとって大切な存在であるということを実感したのではないかと思った。私もその思いがよく分かる。私は秋田県出身で、東京の大学に進学するために上京し、現在は一人暮らしをしている。実家で暮らしているときは、正直なところ家族から何か言われるとうるさいなと感じることがあった。しかし離れて暮らしてみると、それが楽しくて幸せな時間であったということが分かり、家族の大切さが身にしみて実感した。主人公とは違う境遇ではあるものの、気持ちを共感できる部分があったのではないかと思っている。

また、この作品は現在の社会状況と似ている部分があるように感じた。中学校の教頭である赤シャツのことを教員全員が異議申し立てをしない点である。教頭であるという立場を利用して、他の人々を自分のいいように活用している場面が多々ある。例えば、マドンナと英語の教師であるうらなりが婚約する予定だったが、婚約破棄さ

せ、自分のものにするためにうらなりを転任させようとしている部分である。その部分は、現在問題となっている加計学園獣医学部新設と繋がる場所があると思っている。総理の友人が関わっている大学に新設しようとした問題は、総理大臣という立場を利用して、新設することを受理したのではないかと感じてしまう。自分の立場を利用して、自分のいいように事を進めようとするのは今も昔も同じなんだと思った。

また、長いものに巻かれているところである。これは画学の教師である野だが教頭の赤シャツに全て従っている部分が作品中に出てくる。例えば、生徒が主人公にいたずらをした際の処分を決定する会議には、赤シャツが寛大な処分をするべきだと発言したら、野だも寛大な処分をするようにと発言している点である。これは権力がある人に反抗する意見を述べたら、自分自身が煙たがられる、さらに出世が見込めなくなるという考えからだと感じる。これは現在もあることで、上司の意見が間違っていたとしても、そうですねと賛成しなければいけない。それは自分の意見を言うてしまうと生意気だと言われてしまうため、違うと思ったとしても上司の意見を素直に受け止めなければいけない。作品中で主人公に宿舎のおばあさんが若い時は腹が立つものだが、年をとるとあの時我慢しておけばよかったと思うこともあるというように語っている。それも大切なことだと感じている。自分の考えが至らないから上司の意見が間違っていると思いついてしまうという場合もあることは分かる。しかし、ずっと長いものに巻かれるのもどうかと感じる。社会をうまく生き抜くのは難しい。そのためうまく社会を生き抜くための知恵をこの作品から学ぶことができるような気がした。

最後に「坊っちゃん」を読み、主人公が自分の性格をきちんと理解しているところが尊敬する点だと感じた。せっかちであるということや癩癩持ちであるということを知っていてあり、自己理解できているためすごいと感じた。私ごとではあるが、今年就職活動を行い、自己理解がきちんとできていなかったため、自分がどのような人物なのか迷走することが多々あった。そのため、自分自身がどのような職業に就きたいのか明確にするのに時間がかかった。その点、主人公のように自己理解がきちんとできたらよかったなと思い、主人公の性格が羨ましくなった。

最近本を読むことがほとんどなかった。しかし様々な作品と出会うことで、人生の糧になるものが多いと気づくことができた。次はどの作品を読もうか？今からわくわくしている。

夏目漱石『こころ』岩波文庫

佳作

## 今、わたしができること

中国語学科 2年

黒岩 光里

実は私はいま、「頑張っていない自分」と向き合っている。大学に入る前、私は夢や目標を抱いていたはずだった。たとえば長期留学をするという夢だ。しかし迷った末に留学をしないと決めてからは、大学の勉強に力が入らなくなり、授業を休むことが多くなった。留学をしない分、日本でどのようにして、どれだけ勉強を頑張ればいいのか分からない。2年生になったのに、どのような職に就きたいのかも決まっていない。今学んでいることを将来どのように仕事に活かしていったらいいのか見当もつかない。このままの自分でいいのだろうか。自分が思い描いていた道とは違う方向に進んでしまっているようで、本当に不安だ。

そんなとき、私は本書を手を取った。理由は、『置かれた場所で咲きなさい』というタイトルに一目惚れしたからだ。中にはもっと素敵なお話が書かれているのではないかと興味をそそられ、読み進めることにした。

本書は、キリスト教のシスターである著者が、日々の生活の中で感じたことを自身の言葉でわかりやすく書いた本である。著者の渡辺和子さんは9歳の時、2.26事件という青年将校たちが起こしたクーデターにより、陸軍教育総監であった父を目の前で殺されるという壮絶な経験をした人だ。その後、36歳の若さでノートルダム清心女子大学の学長に就任し、27年間在職した。学長という役職によるストレスや過労が原因でうつ病を発症、さらに60代で膠原病にかかり、薬の副作用で骨粗しょう症になるなど、過酷な人生を歩んだ。

意外なことに、本書の内容はそんな激しく苦しい人生を感じさせないものばかりだ。私にとって最も印象に残った部分は2つある。1つめは、「ほほえみ」や「笑顔」について多く書かれている点だ。ここでいう「ほほえみ」や「笑顔」とは、つらい状況に置かれて心に余裕がない時ほど、自分自身と周囲の人たちに対して「ほほえみかける」という行為だ。これはそう簡単にできることではない。私も含め多くの人は、心に余裕がない時には自分のことで精一杯になってしまうものだ。

たとえば、私のアルバイトは接客業なので、日々さまざまな人と言葉を交わしたり要望に応えたりしている。なかには好ましくないお客様もいて、理不尽なクレームやトラブルがあった際は、つい「なんだか嫌なお客さんだな」「わたしはちゃんと接していたのに、どこがダメなの？」と考え、それが表情に出てしまう。しかし相手の立場になってみると、不愛想で怪訝な顔の店員がいたらどう思うだろうか。

本書には「苦しみという土壌に咲いたほほえみは、お金を払う必要のないものなが

ら、ほほえまれた相手にとっては大きな価値を持つのです」と書かれている。苦い経験を味わいながらも笑顔でいることに対して価値を見だし、なおかつその笑顔の価値を周りの人にも感じてもらう、という考えがとても素敵だ。思い通りにいかない時、失敗をしてしまった時に、私もあえて笑顔でいられる人、自分と周囲を笑顔で変えることができる人になりたいと思った。

2つめは、「ものの見方を変えると別のことが見えてくる」という考え方である。本書では、水道工事をしている人たちのそばを通りがかった2組の親子のエピソードを紹介している。最初の母親は、「おじさんたちが、こうして働いてくださるおかげで、坊やおいしい水が飲めるのよ。ありがとうございますと通りますよね」と子供に言い、次に通った母親は、「坊やも勉強しないと、こういう仕事をしないといけなくなるのよ」と言ったという。

前者は労働者たちのおかげで水が飲めているという状況を理解し、感謝の気持ちを持てる母親だろうし、後者は職業に対する偏見を持ち、子どもにもそれを伝えてしまっている母親である。いつでも水道水を使え、電気で光を灯せる快適な暮らしが当たり前のようにになっている私だが、「当たり前」から少し視点を変えるだけで、見えなかった大切なものがみえることに気がついた。

この考え方は、自分と向き合うときにも必要だと思う。私はよく、結果にとらわれすぎてうまくいかないことがある。結果がすべてで、成果を出さないと意味がないと思うあまり、学習面で完璧を求め、結局息切れしてつまづいてしまう。私の今の目標は語学検定の合格なのだが、1年生の頃から挑戦しているのに未だに達成できずにいる。もしかしたら私は、検定に合格したいという気持ちが先走って、中身のある勉強ができていないのかもしれない。勉強は成果だけでなく過程も大切だ。今後はその時に自分ができることを信じ、目標までの過程を重ねていきたい。そのためにまずは自分の実力を把握し、レベルにあった勉強を地道に続けていこうと心に決めた。

こうやって考えていくうちに、『置かれた場所で咲きなさい』というタイトルになぜ私が一目惚れをしたのか、その理由がだんだんと見えてきた。人は、どうしても自分の理想や考え方に沿って生きてしまい、その道から少しでも外れるとつらく苦しくなると、自分を責め周囲への感謝も忘れてしまう。でも本当は、目標を達成できなかった時でも、今までやってきたことや、積み上げてきた努力に対して、まず自分自身が自分を認めてあげるべきなのだ。そうすれば、不本意な状況に置かれても笑顔を見せる余裕が生まれるし、周囲に感謝しながら自分の力を信じ、次に繋げていける。私も、「頑張れていない自分」ではなく「頑張っている自分」を励ましながら、今ここで花を咲かせるために前へ進んでいこうと思う。

渡辺和子『置かれた場所で咲きなさい』幻冬舎文庫

佳作

## 「本当の意味を知ること」

心理カウンセリング学科 3年  
清水聖香

女性の役目とは何か、また女性にとって幸せとは何か。家事に育児に、と一家を支える存在であることなのだろうか。それとも、今後の日本社会のさらなる発展のために新しい戦力として戦っていく強い生きものであること、なのだろうか。生涯を共にするパートナーと家庭を築くことが幸せなのだろうか。あるいは、趣味や仕事に没頭し、実績を残し名誉が与えられることが幸せに繋がるのだろうか。そして私たちが生きていくためには、何が必要であり何が不必要なものであるのか、そしてそれらを取捨選択した時、はたして女性にはどういった役目が残されており、幸せだと思えるのだろうか。

答えは人それぞれ違い、正解などという生き方はない。幸せも人それぞれであり、何か一つの目標を成し遂げた時に、幸福感や満足度が高まるのであろう。本書では、都会を離れ島で一人過ごす時間を与えられた女性が、女の役目が与え続ける役目であるなら、女はどのようにすれば心が満たされ、幸せであることを実感できるかについて答えを探す物語となっている。科学技術の進歩により、社会が発展し、女性の立場はいまや男性と等しい、もしくはそれ以上の地位を確立してきている。幸せの形についても変化し、以前では家庭を築き子孫を残すことに幸せを感じていた女性が多数であったと考えられていたが、今では結婚が必ずしも幸せになれるとは限らず、独立して各々好きな時間を過ごせていることに幸せを感じる女性が増えてきている。実際、私自身も結婚をするよりは自らのキャリアアップのために働き、下の者に敬われる、慕われる存在であることに幸せや満足感を得ている。もちろん、私はそのための犠牲、つまり結婚を不必要なものとし、それを捨てる選択をするということになるが、その時私に本当に残るものは何であるか、何を得られるか常に不安を抱いている。この不安を取り除かない限り、私は本当に幸せにはなれないだろうと思っている。これはあくまで私の考えであり、筆者とは異なる答えを見つけ出すのであろうとも思っている。しかし、本書を読むまでは女性の幸せや役目についての答えを探そうとも思っていなかった。心の隅に眠ったままであり、この答えを探そうという行為自体が不必要なものとして捉えられていたに違いない。

私が本書を読んで、女性の幸せについて考えた時、真っ先に浮かんだのは母の顔であった。母は幸せなのだろうか、母は私たちと一緒に過ごすことで、私たちにとどのような幸せの形を見せてくれていたのだろうかと思いついてみた。

私の家庭は母子家庭であり、幼少期から母の手一つで私と三つ上の姉を育てあげた。

そのため、私は他の同年代の友達よりも我慢強く、要領がよく、教師からも他の大人からも褒められることが多かった。その当時の私にとって、母が私が褒められているのを嬉しそうに聞いてくれていたことは、何よりも幸せを実感する瞬間であったからだった。この時、母の幸せは私たち娘が高い評価を得られた場合に感じるのだろう、と考えた。私たちにとっては何とも寂しい結果だが、それ以上に母の期待に応えたいという気持ちでいっぱいだった。幸せの形が丸や四角などの形として存在できるものと同じように、私たちにとっては幸せという概念を需要と供給という二つの別々な円に分かれているものだと思っていた。求められたらそれに応える、それによってお互いが分かち合えなくてもお互いに幸せになれていたからである。私も、そう思うことが幸せであるのだと考えてきた。母だけでなく、友達にも同じ考えで過ごしてきた。今でもこの考えは間違いだとは思っていない。しかし、幸せでないことも同時に理解することができた。私たちは孤独であり、しかも地理的な意味ではなく精神的な意味での孤独である。筆者が感じた孤独とはまた少し違うと考えられるが、私の感じた孤独は内的な繋がりを母との間に全く感じるができなかった孤独である。私自身が繋がっていないことによって他人、つまり母との繋がりも感じられていなかった。これが幸せといえるだろうか。筆者は、島での生活によって孤独という本当の意味を理解したが、私は身近な親しい関係の中で孤独という本当の意味を理解した。私はこの意味を理解し、内的な繋がりを持ち、他人としてではなく自らが接触し話し合うことで、本当の幸せをつかむ第一歩を歩めるのではないかと考え直すことができた。

本書を読んで、女性の役目について理解しきれなかった。女性は与え続けることを任務としている、というのが筆者の考えであるが、与えるというのは女性だけではないだろう。普段の日常からしても、女性が与え続けている印象はない。物理的に与えるのか、精神的に与えるのかによって変わってくると思うが、女性は精神面において与え続けることに共感できたが、本書が語る女性の役目においてはもう少しみ取れるよう努力したい。

今回感じたことは、幸せの意味を理解するためには孤独を理解することが必要であり、孤独を選択することによって幸せを感じられることができるのだという、正反対の意味を持つ言葉が隣り合わせでいて、全てが楽しいまま、寂しいままでは本当の意味、その先を知ることができないのだということである。心理学的観点から考えると、ゲシュタルト療法の「気づき」を、キーにしているのではないかと考えた。そして、現代の女性における「今」に注目してほしかったのではないだろうか。本書も、ただ読むだけでは筆者が何を訴えたいのか理解することは難しいのかもしれない。言葉の裏に隠された思いに気づくことを望んでいると考え、私はさらに深くまで読み進め、今における女性の本当の役目、そして幸せとは何かに気づきたい。

アン・モロウ・リンドバーグ『海からの贈物』新潮文庫

平成29年度図書委員

心理カウンセリング学科 (心理学研究科)	高橋 稔
人間福祉学科 (生涯福祉研究科)	六波羅 詩朗
子ども学科	山中 智省
児童教育学科	小林 昌美
社会情報学科	張 元宗
メディア表現学科	小林 頼子
地域社会学科 (国際交流研究科)	石井 貫太郎
経営学科 (経営学研究科)	井上 綾野
英米語学科 (言語文化研究科)	薬師 京子
中国語学科	胎中 千鶴
韓国語学科	咸 周完
日本語・日本語教育学科	金澤 裕之
リハビリテーション学研究科	木下 修
生活科学科	田中 あゆみ
製菓学科	庄田 美保
ビジネス社会学科	藤森 憲司
新宿図書館長	沢崎 達夫

編集・発行 2018年2月9日発行  
目白大学新宿図書館